

女たちが、ゆうに一世紀間は、後には、サルディニアの女流作家グラチア・デレッダの長編小説「悪の道」(一八九六)のなかの〈チア・マリア〉のように、近隣の、奇蹟をあらわすというマリア像のもとへ巡礼し続けたこと、そのマリア様から、正しきを記憶し、悪しきを忘れることができずようと請い願ったこと、それはちょうどローマの少女たちが同じことを〈レテの愛の神〉の神像のまえで祈ったのと同様であったことなどを、推測できるのである。このサルディニアでは、例外的に、ペンを持つ作家として忘却の問題を描いたこのような女性に出会う。しかしそれは彼女がある小説の中で、その他のところでは全く異なる、なんとも男っぽく荒っぽい話の筋がまかり通っている、そのような小説中で、ついでながらに描いたのであった。読者が今眼前にしているこの本、デレッダのこの本でも、たしかに、忘れることと、そしてそれ以上に忘れ去られることによつてかたち作られた、興味深い女性の役割についての話も欠けてはいないが、全体として、自ら著者の視点から、この文化史上の重要テーマを共に論じて行く偉大な女性作家たちは登場しない。レテは確かに女神であるが、しかし女性文学には―これまでのところ―その力は及ばない。それが、それ自体独自の解釈を必要とする忘却の文化史上の事実であり、現象である。それが嘆かわしいと、ことあげすべきかどうか、この忘却のレテ神についての学問上の空白がもっと埋められない限り、私はあえて決めたくはない。しかしこの頁は、将来間違ひなく埋められずにすまされることはないであろう。

をもたらしした。彼は少なくとも六週間の禁欲を余儀なくされたのである。つまり、当時の水銀療法で治癒するにはそれほど長くかかったのである。その間カサノヴァは、アンリエットのことと、彼女がカサノヴァさん、あなたは私のこともお忘れになるでしょう、と言ったその予言のことをつらつら思い返す機会に恵まれたのであった。彼はアンリエットのことをかくも早く忘れたがった自分を恥じたのである。

ここで、カサノヴァの自伝回想録の読みと平行して、もしもアンリエットの自伝を手にすることができ、それを読みながら、彼女がどんな想いで、またどのような気持ちで、男カサノヴァのことを見ていたのか、あるいは彼女の方もカサノヴァのことを忘れているのか、忘れてしまわなかったのかがみられるとすれば、随分と解らないことを明らかにできるのではないだろうか。しかしアンリエットの自伝は存在しない。私たちにできるのは、ただ、先に写した、あのカサノヴァによって伝えられたアンリエットの手紙と、カサノヴァ研究が明らかにした断片的な状況証拠から、実に興味深いに違いないであろう文書がここでは私たちの眼から消え失せている、ということがおほろげに判るのみである。

さて、カサノヴァがこの愛の物語を記述し、アンリエットはそうでない、という事実を前にして、その理由を推測するのはさほど難しくない。つまりカサノヴァは男であり、アンリエットは女であったのだ。昔は、女性が女性の礼儀規準を越えて、男同様ペンを執るのはそもそもきわめて稀であり、女性が忘却の芸術という難解な芸術で名を成すなどと言うことは、倍して稀であり、私の知るところではそのような例はない。どうして女性たちはそんなふうにしなければならなかったというのだ。女性たちは実際歴史の中では、容易に忘れ去られる役割を振られてきたのだ。あるいはもし彼女らが、カサノヴァのアンジェラ、ルチア、ナネット、マルトン（これらは彼女たちの個人名、いわば源氏名でしかないのだが）たちのように忘れ去られなかったにしても、彼女たちは何一つ書き残していないし、そしておそらく彼女たちは文字が綴れなかったのだ、彼女たちのこころのだけは、当てずっぽうにしか判らないのだ。これらの女たちが、忘れること、忘れ去られることについてについて、どのような想いを抱いていたかは沈黙の闇に覆われたままである。それでも私たちは、彼

してもしも偶然が、あなたに、わたしが何者であるかなど、こつそり知らせるようなことがあつても、あなたは何ひとつ知らない、というように振る舞つて下さい。そして、わたしの愛しいおひと、わたしがわたしの境遇をきちんと整えたこと、あなたなしで居られる限り、わたしはわたしの残りの人生を幸福に過ごせるだろうということを覚えて下さい。わたしはあなたが何者であるかを知りません。しかしわたしは知っています。この世でああなたの他にわたしのことをよりよく知っているひとは居ないことを。将来とも、わたしは、わたしの人生で愛する人を持つことはもう決してないでしょう。けれどもわたしは、あなたがわたしと同じことを思つたりなさらないように、と思います。わたしはあなたが、さらに他の女たちを愛し続けられることを、別のアンリエットを見出されることを心から願っております。永遠に、さようなら。

カサノヴァはアンリエットを忘れえたのだろうか。彼の書いたものを見る限り、答えは否である。へわたしは彼女を忘れなかつた。彼の言うことを信じることにしよう。カサノヴァは、アンリエットの棲む城のあるプロヴァンス地方を訊ね歩いたのだが、彼女に相まみえることは再びなかつた。彼女アンリエットは、彼カサノヴァの前から身を隠し続けた。もかかわらず、この恋人達は、カサノヴァがこの世に別れを告げるまで、友情に満ちた手紙を交わし続けたのである。

かくしてカサノヴァの忘却の才能はそのよつてたつ基盤を永久に奪われてしまったのだろうか。？ おそらく総てそうだといい訳ではなさそうだ。であれば、それに続くカサノヴァの生涯の物語のその先を見てみよう。アンリエットの別れの手紙を読んだカサノヴァは、何日間も惚けたようになっていた。彼は食はず、飲まず、誰しも声をかけることすら憚られた。それでもその後、友人の一人が、カサノヴァを、『愛の癒し』という題目の芝居へと引っぱり出すことができた。そしてそのとき、カサノヴァが自伝中のアンリエットの物語に続く章に、「ある女優との腹ただしい情事」と名付けている、そのようなことがたちまちにして起きたのであつた。その色事は、エロスの巨匠カサノヴァに、世にも不愉快な性病

ければ、これらのどちらが本当に彫り込まれた言葉であるのだろうか、という疑問が生じる。というのは、よく見ると、両者は、同じことを言っていない。すなわち、特にカサノヴァの自伝の中の「・・も」が、両者のめざましい違いを形作っている。アンリエットは、ひよっとして、共に暮らした三月の間に、彼女の愛人カサノヴァが、忘却の芸術家であることを知り、彼女みずから「も」、忘れ去られてゆく恋人たちの仲間に加えられることを予期していたのではないか？あるいは、アマチュア探偵たるカサノヴァ研究者の伝える文句の方を強く言いたかったのだろうか。もし忘却がへいつの日か二人の間に割って入ってきても、その忘却すらも一度きりの出来事で終わるのではないだろうか、と言うことを主張したくて？ これら二つの仮説とは異なる二人の別離の真相が、ある手紙の叙述の中に見出されるようだ。アンリエットの手で書かれたその手紙というのは、カサノヴァがパルマに立ち戻ったときに見出したものである。かれはその手紙の言調をその自伝の中で正確に伝えている。忘却についての一節は次のように記されている。

わたしの愛しいおひと、あなたと別れなければならぬのはこの私なのです。わたしの苦しみのことを考えて、あなたの苦痛を一層増すようなことはなさらないで下さい。わたしたちは心地よい夢を見たのだ、と思うことにいたしましょう。そして私たちの運命に不満を鳴らすことはしないことにいたしましょう。なぜというに、あんなにも愛らしい夢は長続きのするはずはなかったのですから。だからわたしたちは、三月の間、ひっきりなしに、完璧に相互に幸せにすることができたことを、誇らしく思うことにいたしました。なぜというに、そんなふうに分たたちのことを言える者などこの世にほとんど居ないのですから。だから私たちはお互い決して忘れないようにいたしました。そして、私たちの愛のことを、それが私たちの魂の中で再び生き生きと甦ることができるよう、胸の内、幾たびも、思い出すことにしましょう。魂のなかならば、別れはどうしようもないものであっても、なお一層生きたものとして愉しむことができるのですから。だから、わたしの消息などを決して訊ねたり調べたりなさらないで下さい。そ

なのか、と。やがてカサノヴァは、アンリエットの奇妙な身の上を少しづつ知ることになる、あるいは推し測る。アンリエット（彼女はいつもその名前で人からよばれたがっていた）は、明らかに、プロヴァンスのある貴族の家柄の出身であり、修道院に押し込まれる危機から逃れ出て、今は身内に探索されているらしい。彼女がみつけだされることは、避けがたいかもしれない。しかしそれはカサノヴァにとっては別離を意味する。運命の影が二人を怯えさせる。その運命がやってくることをアンリエットは知っていた。そして、彼女の恋人もそれを予感していた。がしかし、この男カサノヴァ、忘却の匠の一人。ながらくそのことを認めたがらず、あるいは本当に別離があり得るなどとは思いたくなかった。忘却の匠、この度だけは忘れることがいやでたまらなかつた。

運命の糸がパルマで結ばれる。たまたまこの地に来ていたあるフランス人が―彼もまた好奇心に満ちあふれていた―冒險好きのアンリエットの素性を見抜く。手紙がイタリアとフランスの間を行き交い、やがて間もなくアンリエットの懼れていた帰還のときがやってきた。カサノヴァは、石のように重い心を抱いてふたりに共通の運命に添わなければならぬ。アンリエットをジュネーブにまで送って行き、二人はそこでホテル「天秤」に投じる。そしてさらに幾日かの満ち足りた時間が二人には恵まれた。そして立派な馬車が、再び囚われの身となった女冒険者を、彼女の故郷プロヴァンスへと攫って行く。深い悲しみに閉ざされ、幸福にも愛にも絶望し、ジュネーブのホテルに戻って来たカサノヴァ。

別れの手紙をもった使者がカサノヴァのところへやってくる。そこにはただ、〈久遠にさようなら〉としか書かれていない。そしてカサノヴァは、その手紙の続きを、ホテルの部屋の窓ガラスに見つける。それはアンリエットがダイヤモンドの指輪で彫りつけたものだった。カサノヴァはそこに、こころ密かにいつも懼れ続けていた忘却のモチーフを発見する。〈あなたもアンリエットのことは忘れること〉、と。現代のあるカサノヴァ研究者が、ジュネーブのホテルで、アンリエットの彫りつけたものを自分の目で見たと主張している。彼によれば、〈いつの日かあなたもアンリエットのことには忘れて頂戴〉と、回想録のものとはなぜか少々異なった形で記されたものを。もし研究者の報告がごまかしや伝説でな

カサノヴァは、美しく、賢明にして教養もあるこの女性に夢中になる。女は生得の趣味の良さを備え、測量士並に地理に詳しく、哲学についても、彼のトウスクルム風の議論に対して、キケロ張りに張り合うことができる。アンリエットは巧みにチェロを奏し、イタリア語は一月もたたぬうちものにしてしまう。〈神々しいまでのアンリエット〉とは一体全体どんな女なのか？　ところが実は、ハンガリーの部隊長も彼女が何者なのかを知らず、好奇心で生きているようなヴェネチア人カサノヴァにも知る手だてがない。アンリエットはその身上を秘密に堅く閉じこめている。そして当然のことながら、カサノヴァの好き心はさらに煽り立てられるのだった。ほどなく彼の恋心は赫々と燃えあがり、アンリエットもまたカサノヴァになびきはじめる。やがてカサノヴァは、アンリエットとの恋の'avantureが手に余るものになっていたハンガリーの部隊長とも意見が一致する。つまり、三人の納得づくのうえで、アンリエットはカサノヴァに乗り換え、新しい愛人とはなる。アンリエットは、一人旅立つ部隊長との別れに臨んで、今より先には彼女の居所などを決して探ったりしないこと、そしてこの先、たとえ彼女の人生行路が彼の行く道と交るようなことがあっても、見知らぬ女のように振る舞うこと、という厳しい禁令を言い渡した。(死を忘るるなかれ、どころではない||訳者補)　へわらわのことを忘れよ」という一言を添えて。

この忘却せよ、という禁令は、二人の別れ話を側で聞いていたヴェネチア人カサノヴァをひどく考え込ませる。そして自分の情婦に向かって曰く、フランス人はおそらく、だがイタリア人は断じて、命令に従って忘れる、などということできない、ということを判らせようとする。へわらわのことを忘れよ」と云うは、た易い。しかし意志的に忘れるというのは自分にはおよびもつかない、と。このときの会話から、二人の想いの中に、忘却のモティーフが繰り返し立ち現れることになるだろう。

さてカサノヴァとアンリエットは連れだつて道行き、互いに愛し合い、幸せいっぱいである。これは長続きするのだろうか。そもそも、それは長続きしなければならぬものなのか、とアンリエットは反問する。幸福はそもそも永続するもの

ずっと手元に残していたのである。かくしてカサノヴァは、生涯において愛した無数の彼女たちのことを苦もなく思い出すことができたのである。しかしカサノヴァはその無数の色恋沙汰を鼻にかけることは決してなかった。カサノヴァはいかなる点でもドン・ジョヴァンニ（ドン・ファン）ではなく、千人斬りの記録を残したレポレッロの性格も持ち合わせてはいない。カサノヴァは、〈女性に関しては愛の力が体内に続く限り〉と、リュディア・フレムはカサノヴァの伝記の中で言っている。彼女たちを、〈一人、また一人と別々に愛していったのだ〉。確かにカサノヴァは、新たな恋の冒険のいずれにあつても―それにはかれの全ヨーロッパ遍歴が大いに役だったが―絶えず新たに五感の歓びを探し求めたが、その都度彼を駆り立てたものは、新たな恋の遊戯がいつも前のものとは異なり、かれの好奇心をいつも別様に満足させるものであるだろう、ということだった。愛書家は、実際カサノヴァがまさにそうであつたのだが、本を読むようにあらゆる女性を読むとする。そしてそのことには、本の読者として、一冊の本を開くことができ、閉じることができなければならぬ、ということも含まれる。本を愛することと女を愛すること、二つの読書の間には、カサノヴァの時代のエロティックな言葉では失神と名づけられる中間休止あるいは切れ目がある。が、その直後の新たな出会い、という感覚の惑乱のさ中に挟まれた忘却ではあつても、しかしだからといって、後になって思い出すにやぶさかである、というものではない。

そのことは、カサノヴァの残した回想の物語のなかでもこの上なく美しい愛の物語にもっとも端的に示されている。それはアンリエットとの出会いの物語であり、カサノヴァの生涯の回想録中では、ささやかであるが、しかしそれ自体完結した愛の物語ともなっているものである。アンリエット、というのがこの〈若き女冒険者〉の名前であるが、カサノヴァは、とある旅籠で彼女と偶然に識り合う。アンリエットは、フランス女性であり、男装し、六十がらみのハンガリー人の部隊長を連れてイタリア中を旅行して廻っている。この部隊長はフランス語ができない。アンリエットの方はハンガリー語を知らない。したがって二人は、意思を疎通するためにラテン語交じりの筆談に頼っていた。これを知ったカサノヴァの好奇心がむくむくと頭をもたげる。アンリエットとはいったい何者なのか？この不釣り合いな二人組との交遊が始まる。

からといって、あのことだけは忘れることはできるものではない。ところがジャコモは、ヴェネチアに立ち戻つてすぐ、もつと地についた忘却法を、それまでほとんど気にもとめなかつたあのアンジェラの友達、一六歳のナネットと一四歳のマルトンから教えられることになる。というのは、アンジェラの了解もとりつけて、前のあの不運だった夜よりももっと幸せな夜をもう一度、という示し合わせが成立したのだ。やがてその夜が来る。この度はジャコモ、一瓶のキプロスワインと燻製の牛舌を手に用意おさおさ怠りなく、寝室に入り込む。ああしかし、肝心のアンジェラは姿も見せない。いまや恋する男はうんざりとする。へもうお終いだ。アンジェラが憎い。ところがジャコモにとってその一夜は永すぎるほどであった。忠実な二人の夜の同行者とともに、愛が若者に恵むものをシーツの下で愉しむには。その愛の歎びについてジャコモは、それが初体験であった、と記している。いまやアンジェラのこととは完全に忘却の彼方へと押しやられる。ジャコモことカサノヴァは、自伝の第一章五節の見出しにこう書くことができる。へわれアンジェラを忘れ得たり。

すでに暗示したが、カサノヴァの初恋の顛末のすべてを私たちが知ることができるのは、かれがフランス語で記し、死後長らくしてはじめて公刊された「わが生涯の物語」という自伝による。この回想録は、西暦一七九七年、カサノヴァが二七歳のとき、ボヘミヤの地、ドゥクス城で仕上げられたものである。彼はそこで若きヴァルトシュタイン伯爵の客となり、死の直前、世間が殆どカサノヴァのことを忘れてしまった頃、最後の隠れ場をその城に提供されたのであった。この本に書かれたような生涯と愛の記憶を残したカサノヴァが、エロスの文学の巨匠として、世界文学の古典として読むことができるのは、このヴァルトシュタイン伯爵のおかげである。カサノヴァは、この自伝の中で、アンジェラのことを忘れることができるに至つたその経緯を思い出しているのだが、実はこの経緯は、この「告白録」（とこの著者は、折に触れ、アウグステイヌスやルソーを引き合いに出しながら言っている）の特異な魅力と逆説性を示してあまりないのである。

いまは浮き世の色恋沙汰から遠く離れてしまったこの老いたる男は、その生涯の記憶を書き残すことができるように、彼をたった一度だけ、冷たく袖にしたあの記憶を書き留めることで補強し、書いたり受け取ったりした手紙の多くも生涯

ラはジャコモを愛しつつ、つまり二人は相思相愛、アンジェラはもうジャコモの妻になる心づもり十分であった。しかし、彼女は結婚するまではと〈竜が玉を守るように〉純潔を守り、とき至るまではと、恋人にほんのささやかなお恵みも自由も許さない。この〈後ろ向き〉のアンジェラの〈吝嗇〉が、恋する男の心の平安を奪い去る。ジャコモに科せられた禁欲は、かれの気持ちへからからに干涸らびさせゝる。彼女に対する愛はいまや苦しみにかわり、なんとしても、〈残酷なアンジェラを暫しの間忘れ〉なければならぬ。そのためには田園での滞在が役立つだろう。ジャコモは、田舎の逗留地で、一四歳の門番の娘ルチアと識り合う。心打つ素朴さに満ちあふれたルチアは、ジャコモには天使が人間になったかと思われる。かれは、邪心のない娘を拐わかして良いものかどうかと、夜もすがら日もすがら、自分自身と闘わなければならぬはめに陥る。とどのつまりジャコモにできたのは、愛情のこもった言葉でルチアをやさしく愛撫し抱擁することだけ、彼女の純潔の座に攻撃をしかけることもなく、彼は田園での滞在を終える。

ヴェネツィアの町に戻ると、暫しの間忘れていたアンジェラに対する愛の炎がジャコモの内に燃え上がる。男の望みだけは解つて欲しい、とカサノヴァはあらためて彼女に迫る。しかしアンジェラは、前と同様、毅然として譲らない。けれどもとことんまで、というわけではない。というのも、その後まもなく、アンジェラが、女友達のナネット、マルトン姉妹と一緒に一夜を過ごすということがある、その夜、蓮っ葉な姉妹の方が、というよりは慎しいアンジェラの方がジャコモを家に招き入れ、部屋にも入れる。一本きりの蠟燭が押し消され、ジャコモは夢にまで見た美しい望みを実行に移そうとする。漆黒の部屋の中では、いちやつきやら、おふざけーカサノヴァは、〈剽軽ごっこ〉と書いているーやらが始まり、姉妹は腹のよじれるほど笑い転げ、あだっぽくもけがれないアンジェラは、結局朝まで、その恋人の手にわが身を委ねることはない。それはジャコモにとっては〈実に腹立たしい一夜〉であった。

ジャコモは、ふんまんやる方ない思いを抱いて、ヴェネチアの町を逃れ去り、博士の学位を取るためにパドヴァの町へゆく。こうなればアンジェラのことはいささつぱり忘れ去ることができるだろうか。いや、博士の学位を手中にした

示すことのできる別のチャンスに恵まれた。一七四一年三月一九日午後四時、カサノヴァは説教壇に登り、処女マリアの純潔な花婿たる聖ヨセフを讃える祭日に説教をすることとなった。カサノヴァは、説教で喋る内容について、あらかじめ研究怠りなく、夜は床につく前に、朝は起き出すや直ぐに、その文句を口で唱えつつ暗記した。記憶力にはなんの問題もないことは、パドゥアでの修学時代にすでに証明済みであった。

このうら若き聖職者カサノヴァは、このころすでに、ヴェネチアの社交界に出入りを許されていた。というわけで、彼は、説教の当日、聖ヨセフの祭日には、モンレアーレの伯爵の家に午餐に招ばれていた。食事は卓上に溢れるほどで、葡萄酒もしこたま飲まれた。その結果は言うまでもなく、カサノヴァは説教の義務をすんでのところで忘れ果ててしまうところであった。教会から使いの者が迎えに来なければならなかった。カサノヴァは、ようやくのこと、時間ぎりぎりに教会に着くこととなった。

さてこの若き聖職者は、たらふく戴いた食事のせいで腹はくちくなり、飲み過ぎた葡萄酒のために朦朧とした頭のまま説教壇に登ることとなった。会衆の顔また顔が彼の眼前にたちはだかる。説教の導入のところはまだしもなんとかやってのけたが、その後は話の筋道を失ってしまい、幾度となく言い間違える。聴衆はひそひそと袖をつつきあい、ざわめき、笑いを囁み殺すのがようやくのことである。カサノヴァはいまや周章狼狽、〈頭を落つこととしてしまった〉のである。苦勞して覚えた説教の文句はきれいさっぱり忘れ果ててしまっていた。半ばは演技で、なかばは本当の気絶で、彼はこの苦境から辛うじて抜け出ることができず。倒れたときに、説教壇の壁の角に頭をひどく打ちつけ、失神したまま聖具室に運び込まれる。カサノヴァの〈惑乱〉たるや行き着くところまでいってしまった。かくて、運命により、忘れっぽいカサノヴァとはなり果て、ついに腹を決めざるを得ないことになる。「こんな仕事はもう止めた。」

かくしてジャコモの前途には、色事をたつつきにする道が開かれることとなる。最初の仕事は、前と同じように、トゼツ口の主任司祭のもとで、正確に言えば、その姪の、麗しのアンジェラのもとで始まる。ジャコモはアンジェラを、アンジェ

時に、記憶と忘却に関して、神話学、歴史学、哲学などの諸学の成果をも取り入れて、記憶と忘却という難問に対して、文学者としての説得力のある答えを出した。人文学的知と具体的な文学作品の解釈とが詩人学者の感性でみごとに統合されている、という意味においてだけでも、ヨーロッパ人文科学の伝統の深みを感じさせるに十分である。さらに付けくわえれば、現代ヨーロッパの碩学たち、ウムベルト・エーコとハラルト・ヴァインリッヒが、記憶と忘却をめぐる交わした弁証法的対話の、実り豊かな結果を目の当たりにできるのが本書である。あるいは、エーコとヴァインリッヒが造りあげた知の遊戯空間のひろやかさに魅了されるといつてもよい。であれば、著者自身は本文中で、忘却の力の前にそういうこともあり得るかも知れないとしているが、よもや本書が後世において忘れさられる、などということは決してないだろう。？。

(部分和訳)

第五章 「記憶と忘却の危険について」の第一節 「忘れていた色事、誠実に想起しつつ物語る」

ジャコモ・カサノヴァ（一七二五—一七九八）は、イタリアはパドゥアの町で一年の間法律を学び、一五歳のとき、ヴェネツィア総大司教の手から四種の下級叙階を授けられた。いまやジャコモは、聖衣を身に纏い、剃髪していたので、外見からも聖職に連なる者であると知れた。何も知らぬ世間の人たちは、ジャコモのことを司祭だと考え、祖母にいたっては、自分の孫は〈使徒〉の一人であるとする思いこんでいた。孫自慢の彼女は、ジャコモが聖職についていることで、魂の平安を得ることができ、他の家族全部にもそれが保証されているのだ、と見なしていたのである。

さて、このうら若き聖職者は、トゼッロの主任司祭教会で初めての説教を行うこととなる。かれは、ローマの詩人ホラーティウスからの教節をテーマに選んだ。ところが説教の草案は、教会の主任司祭にはなんとしても気に入らない。異教の詩人ホラーティウスは、キリスト教会に馴染まないというわけである。しかしまもなくこの若者は、説教者としての力を

ては、かれが、忘却の底に沈み、隠されたままになっていた記憶の方法的発掘によって深層心理の世界を描くよすがとしたことが証される。フロイトは、ひとが「言い間違ったり」、「忘れ損ねたり」する場合、つまり「・・・損ねたり」・・・間違ったり」するのは、偶然によるものではなく、〈忘却〉のありように根ざしている、と主張した。精神障害の発症は、個人個人で異なる忘却と憶記の心的システムと深く関連している、としたフロイトはその理由を因果関係として深層心理のなかに追求した。そして、憶記と忘却の心的システムと幼少時の体験の深い関係をフロイトが重視したのも、よく知られたことである。

【現代学問研究における忘却主義について】 本書のエピローグは、〈学問における忘却主義〉と銘打たれている。現代たゞいまは情報という妖怪が全世界を電線にのって廻り廻っている。たとえば、先行研究者たちの残した大量の〈業績〉を収集し、無数の資料の山を少しずつ崩しながら、それらの整理と理解、解説、解釈から始めなければならぬという強迫観念を先天的に植え付けられた研究者、あるいはまた、二〇世紀末現代では、図書館やインターネット上に累積される研究情報を採集、咀嚼、駆使しなければ一人前の研究者でない〉というオブセッションから逃れられない研究者、あるいは研究の助走段階を切り切るのに長年を必要とし、研究の真の出発点すらもまだ見えないと考える研究者、二〇数世紀の伝統を忘却する地点から新規に始めることができず、と願わないでもない現代人にとって、見るだに聞くだにうんざりするような〈記憶〉の山に押し潰されずに、しかも〈忘却〉の責めを負わずに済ませることのできる可能性はあるのだろうか。ヴァインリッヒは、有る、と云っている。その方法が絶対的に有効である、と言っているわけでは、むろんのことないが。

【知と文学】 ヴァインリッヒは、本書において、エーコの、忘却術なるものは存在しない、というテーゼに屹立する、〈忘却術〉の存在の可能性というアンチテーゼを見事に成立せしめただけではない。彼はまた、エーコの、一見、記号学的に限定された設問の内包する深い文学的意義を見抜き、さしあたりは言語学の立場から巧みに受けとめつつ、しかし同

は、彼は、本書において、世にその存在の広く知られた〈記憶術〉のもつ含意のみならず、〈忘却術〉の存在をも証明するのであるが、これら両者が、人間の精神と肉体の奥深いところに創られる共通の時空間に奥深く根ざしていることをも、主として芸術作品の実際において明らかにしてきた。そして、現実生活に応用されうる〈記憶術〉や〈忘却術〉が必然的に発生したと同じ時空間から、さしあたりは現実への応用や適用とは無縁な、それ自体より創造的な〈記憶芸術〉や〈忘却の芸術〉もまた必然的に生じているのではないか、という仮説を提出し、それをホメーロスやダンテの文学において立証している。彼は、世に広く知られている〈記憶術〉の検証から始まって、〈忘却術〉の存在の可能性を証明し、ひいては〈記憶の芸術〉史と並ぶ〈忘却の芸術〉史を構成する視点を創設し、それを、名匠的な解釈と表現の匠の業を合わせて、批評作品として記述しているのである。

【記憶と忘却は母を同じくする】 さて著者は、〈忘却〉が〈記憶〉と対立する単なる否定的概念ではなく、また〈記憶〉の忘却からの忌避〉でもない、という認識から出発し、むしろ忘却自体が深く記憶の本質的営みに根ざしており、記憶とあいまって、人間独自の精神的時空間を構成していることを告げる。それは人間が記憶と忘却の時空間を生き、またそれについて思索した結果としての文学や哲学に明らかである、と言う。忘却の時空間は、記憶のそれと重複重畳するものであることを立証することがまず彼の主張の出発点であったが、とりわけ、精神の深層における言語活動と深く結びついた忘却とその営みの、精神活動においては通常隠されているかのように見えるものの、その大きな働きを明らかにしようとすることも、本書が書かれた目的であったようである。

【現代と忘却】 その他、マルセル・ブルーストの場合は、清らかな忘却の泉の底からの想起がかれの詩想の起源であることが、ハインリッヒ・フォン・クライストやパウル・ツェラーンなどの詩人たちでは、辛酸の体験を忘れる忘却術を奪い去られる宿命にあったことが、ハインリッヒ・ベルやホルヘ・ルイス・ボルヘスでは、記憶の洪水に襲われ、忘却を逆手にとって手段とせざるを得ない現代人の、苦肉の生き方が描かれていることが指摘される。あるいは、フロイトについ

(と忘却)の数々で構成されている。ここでも記憶と忘却の両者が棲息するあの時空間が文学的想像力の起源であった。

【忘却の名匠カサノヴァ忘却に復讐される】 ヴァインリツヒは、愛の忘却の名匠カサノヴァの場合について、彼がいれば、忘却に逆襲されて記憶の劫罰を与えられ、回想の自伝録を残さざるを得なかった皮肉を、愛情をこめて指摘する。カサノヴァの「回想録」の一節が取り上げられる。縁の深かったアンリエットなる女性から「私のことは忘れて下さい。あなたと別れた後、私はあなたとの至福の時間の記憶を魂の糧に生きていくことができますから」と、愛をこめて〈忘却〉を命じられる。次から次と、その都度数多くの女性を、意識的にか無意識的にか、あるいは意志的にか無意志的にか〈忘却〉してきたカサノヴァが、その理由のただちには飲み込めない〈記憶の忘却〉を最愛の女性から命じられたときの惑乱はいかほどであったか。至福の記憶を意志的に忘却できるのだろうか。意志的に記憶することとどちらが困難であるのだろうか。運命的に忘却の達人であったはずのカサノヴァは、実にこの女性を忘れ去ることができない。その後の両者間の文通という隘路は残されたものの、生身のアンリエットと相会うことのできなかつた彼は、記憶することを意志し、それを紙上に実現する。手紙などを保存しておいた彼は、世間から引きこもって、多くの女性との、わけでもアンリエットと過ごした至福の時日を想起し、回想録を書いた。忘却の名匠カサノヴァが、とりわけ深い愛の記憶を後世に残した。

【理性と忘却】 また近世以降、理性は、記憶文化の最強の支え手であると考えられてきたが、ラブレール、モンテーニュ、セルヴァンテス、レッシングなどに見られる、〈忘れっぽい理性〉の生み出す機知とユーモアには、理性の隠された面、理性がある意味では忘却の文化の支え手でもあることが現れているのではないか、ということが推測される。またルソーやカントについては、〈忘却の啓蒙的性格〉が指摘される。啓蒙性のみならず、忘却にはもつと積極的な、生産的な力のあることをヴァインリツヒは確信しているようである。

【忘却の芸術】 ところで、ヴァインリツヒは、本書中では、ラテン語の《ars》についてと同様、ドイツ語の《Kunst》を〈技芸、術〉の意と〈芸術〉の意の両者に使い分け、また統合して用いるが、それには十分な理由があった。というの

や政治家達の言動に、かの記憶と忘却の時空間の成り立ちや働きを確認する。

【オデュッセウスと忘却・文学想像力の起源】 さらに著者は、ホメーロスやオウディウスなどの文学作品を論じながら、かかる記憶と忘却の時空間にヨーロッパ文学の一流流が発していることを発見する。たとえばホメーロスの「オデュッセイア」。トロヤから故郷イタカへの苦難に満ちた帰郷の旅路の途中で、オデュッセウスとその一党たちは、様々な忘却の誘惑にさらされる。オデュッセウス自身も、女神キルケの場合一年、妖精カリユプソには実に七年間にもわたる愛の魔法にかけられ、故郷への帰還を忘却し続ける。オデュッセウスの人生行路は、故郷への愛||自己アイデンティティの追求||記憶に忠実に生きることと、異国(人)への愛||自己アイデンティティの放棄||忘却への誘惑との間の隘路をうねりながら続いている。オデュッセウスは、記憶への愛と忘却への愛、二つながらを一身に生きなければならなかった。この濃密で狭隘な時空間が、叙事詩「オデュッセイア」の文学空間として展開される。ここに、ヨーロッパ文学の起源についての一解釈が示された。ヴァインリツヒは、この叙事詩を、記憶についてと同様、忘却にもその榮譽ある地位を与えた最初の作品の一つである、と言っている。

【ダンテの文学と忘却】 本書中の「神曲」の解釈の章をめぐるひとは、ダンテの文学的想像力の根幹に、記憶と忘却とともに同時に関わる、あの時空間が渦巻いていることを指摘されて、それがホメーロスに始まるヨーロッパ芸術に深く根ざしていることに気づかされることになる。またそのような視点を与えられると、記憶と忘却がともに棲む精神活動の拠って立ち、またその活動を構成してもいるある豊穡な時空間にひきこまれていく、と云う想いをもつ。例えば地獄めぐりでは、〈忘却を許されない、記憶という劫罰〉を与えられ、地上に帰ることも天上に昇ることもできない、宙ぶりの中間域で苦しみ続けている死者たちから、現世への伝言をダンテは委託される。「神曲」は、作者ダンテ自身が、煉獄、地獄、天国を、ローマの詩人を道案内に経巡ったその記憶の記録であるだけでなく、ダンテが他界に棲む無数の死者たちから委託された記憶と忘却の記録でもある。つまり、「神曲」の文学空間は、ヨーロッパ芸術の伝統に積層された、無数の記憶

れ、ひとは生の核心たる死を日常忘れてゐる。意図してか、意図せざるかを問わず。忘却は手段として、方法として有効であることもある。これら忘却の特性はギリシヤ神話の昔から変わらない。

【忘却の女神レテ】 忘却と記憶の言葉を遡及する旅は必然的に、記憶の女神ムネモシユネや、忘却の川レテにその名前を与えた女神の出自、由来を訊ねる研究に結びついてゆく。或るギリシヤ神話では、記憶の女神と忘却の女神は同じ一族の出身である。忘却が多くの謎を秘めているように、レテの河も人間精神の地下世界を密やかに流れている。レテは、生前の重すぎる記憶を抱いてはへ生きることのできない死者にとつては、忘却という慈愛を恵む女神であるが、しかし一方忘却を与えられることは、たとえば生前の記憶の責務を果たさなかつた死者にとつては（ときに生者にとつても）、苦しみの劫罰と受け取られたのである。この女神が明暗ともに有する複雑な性格は、忘却のもつ深い謎を暗示している。またこの関連では、レテの女神と、生き物すべてに生死何れをも恵む大地の女神ガイアとの類似が思い出される。忘却と記憶の謎の深さについて、死者も生者もそれを知っている、あるいはその知識を生きてきた。ヴァインリツヒが、ギリシヤ神話に始まるヨーロッパ精神史、芸術なかんづく文学において、考察の原点に置き、描き、解釈し、想いを伝えようとしているのはまさにそのことであるように思われる。一方、「メノン」において、学ぶということは、前世において観照していた永遠のアイデアを現世において想起することだ、としたプラトンの形而上学の基盤には、前世におけるアイデアの観照、生誕という一時的忘却、学問をするということは生前観照した知識を想起すること、という定理が座っていた。ここでも、前世から、誕生、現世を貫く独自の時間性と、記憶や忘却を内包する精神空間とが統合された或る謎めいた時空間が問題となっている。歴史家ヘシオドスは、その「神統記」で、太陽神アポロの近くにゐる記憶の女神ムネモシユネーに対するに、暗い夜の一族である忘却の女神レテを対置した。人々は、記憶し続けたいとき、または苦悩や災難を忘却したいとき、それぞれの女神に祈りを捧げた。また古代ローマでは、美の女神ウエーヌス神殿と並んでへレテの愛の神の神殿があり、苦しい恋、例えば不倫の恋の炎を鎮めたい、忘れたいという人たちがその前に額づいた。ヴァインリツヒはまた、哲学者

感される、といつてよいだろう。

【記憶と忘却の時空間】 あるいはまた、記憶と忘却についてのめざましい視覚的メタファーとして古くから用いられてきたのは、チョークや鉛筆などの筆記用具と蠟板や黒板や紙などである。文字や各種記号が、書き記されたり、彫り込まれたりして形像を成したものは、感覚器官を通じて記憶内容を補強し、しかしいったん、それらが削り取られたり、水で拭い消されたりすれば、それは記憶内容の脱落を促進したり、あるいは意識の底に記憶を押しやつて、忘却を促進することになるだろう。筆記板上に記憶と忘却のドラマが演じられている、と見ることも可能である。そのドラマを演出するのは、手、肉体、記号、文字、言葉、像、時間、などで構成された、隠されて豊かなある時空間。このようなメタファーは、文字言葉、記号言語などとともに、記憶と忘却の時空間の秘密の解明に役立つものではないか？

【忘却の芸術】 さて一九九七年、この前年に出版された「忘却術は存在するか？」の？マークが外され、いわば満を持して世に放たれたのが本書、「レテ―忘却の芸術と批評―」である。ヴァインリツヒは、エーコの挑撥的な講演後から暖め続けていた〈記憶と忘却〉のテーマを巡り、言葉の科学者としての蘊蓄を傾け、ヨーロッパ芸術、わけても言語芸術作品中に刻印された、欧州の人間精神の営みについて、詩人の愛情と共感をこめて書きあげた。この言葉の科学者にして詩人である著者は、まず最初に、ラテン語や欧州各言語に現れた、記憶と忘却にまつわる多くの言葉の由来や姿形、含意を訊ねる旅に出る。記憶と忘却を表現する言葉についての語源や語彙、語形、慣用語法、格言、伝承などを諸言語に訊ねるが、ことは言葉に直接関係することであり、文学は当然のことながら、哲学、神話学、民俗学、等々の周辺科学からの暗示や示唆も、直接は多くは記されないまでも、背後に秘められて、多くの問いかけと含蓄深い解釈がなされる。例えば、ラテン語の異能動詞〈oblisci〉〈忘れられる〉という言葉は、人間の心と魂における忘却の実相を巧みに映したものでないだろうか、とヴァインリツヒは言う。言葉に現れた現実からして、忘却には記憶同様、日常性と恒常性があり、歴史が包含され、独自のシステムが内蔵されて機能している。ひとは忘れる。恋人は愛の誓いを忘れ、政治家は選挙公約を忘

後にあたるが、『忘却術は存在するか?』という一書を世に問うた。ここで彼はまず、一九六六年に出版された、F・A・イエーツの『記憶術』に言及しつつ、〈記憶術〉がヨーロッパ文化史上、主として修辞学の伝統のなかで連続と受け継がれてきたことを再確認している。この関連では例えば、キケロやクインティリアン、ヘレニウスの名前が挙げられるだろう。ここで言われている〈記憶術〉は、憶記のための技法であった。それは、一般的で、専門学に分化していない基礎教養、また実践的な予備学の一種とみなされていた。この〈記憶術〉は、法則的なものとして理解され、従って教えることができ、かつ学ばれうる知識を意味した。このような記憶術は、西洋中世にあっても、自由七学芸の一たる修辞学に属してはいたが、体系的な学問的知識を意味するものではなかった。それはまた、近世以降のロマン派や後期ロマン派の、インスピレーションとか創造性、天才の概念などに伴う〈観念連合〉と関連づけて論じられるようなものでもない。

【記憶術】 古典古代から中世にかけての〈記憶術〉は、〈具象的なもの、眼に見えるものの方が記憶に留まりやすく、単独のものより、複数の事項を組み合わせて覚える方が忘れ難い〉という考え方に基づいていた。例えばローマの雄弁家たちは、予め、演説に必要な特に記憶すべき事項、しかも未だ係留点をもたず浮遊している複数の記憶像を、家屋内空間の特定の位置に連結させて憶記した。演説する際には、順序正しくこの室内空間を想起し、それぞれの空間の具体的な位置に連結させておいた記憶像を言語化しつつ、記憶した内容を順序正しく引き出す、という方法を実践した。

【記憶と忘却】 ところで、このような〈記憶術〉にもすでに、〈忘却〉との深い関連が窺い知れることをヴァインリツヒは確認している。たとえば演説内容の想起は、それぞれ室内空間に張りつけられていた記憶像を、空間を序列的に想起することで、連鎖的に引き出すという方法で成し遂げられた。その場合、空間序列に従った記憶像の連続・連鎖的想起は、時間的序列の創出をも意味する。しかし、もしも演説者が空間序列の想起に失敗したときには、時間的序列の想起も挫折し、両序列を連結していた記憶像は、序列の浮かぶ流れの水底深く沈んでしまって、演説者の識域上に浮かび上がることはないのではないか?。すでにしてここに、記憶と忘却の両者が相互に、またともに深く関係するある時空間の存在が予

ハラルト・ヴァインリツヒ著『レテの流れ ―忘却の芸術と批評―』 解題及び部分和訳

中尾光延

(解題)

【ウムベルト・エーコの挑撥】 かつて、ウムベルト・エーコを囲む友人の間で、〈歴史上存在しなかっただけでなく、理論的に有り得ないので、存在しない学問分野〉を發明しよう、という遊びが行われた。エーコはこの時、キケロや四世紀イタリアの〈記憶術〉*ars memoriae*の理論家達などの著作から〈忘却術〉に思い至り、それを*ars oblivionalis*と名付けた。しかし、彼はのちに、ある講演（一九六六年）において、〈記憶術〉の対蹠としての〈忘却術〉はあり得ないことを、記号学の立場に拠りつつ、精密な方法論に基づいて立証しようとした。あらゆる記号は、非在ではなく存在を創造するものであるから、という理由であった。（論文として、ウンベルト・エーコ『忘却術だつて？そんなもの忘れてしまえ』一九八八年）。しかしハラルト・ヴァインリツヒは、エーコの刺激的なテーゼを学問的挑撥として受け止め、忘れることがなかった。本書『レテの流れ ―忘却の芸術と批評―』は、ヨーロッパ精神史上の、ある根元的な思考についての巧みな問いかけに対して、言語学者、文学者、詩人でもあるヴァインリツヒが、いわば半世紀にわたる歳月をかけて出した答えとしての研究書であり、同時に本書は、ヨーロッパ人文科学における弁証法的対話の実りの豊かさを示す文学批評ともなっている。

【忘却術は存在したか？】 ヴァインリツヒは本書出版の前年一九六六年、この年はエーコの件の講演のちょうど三十年